

●高澤良一 第十句集 素抱

●一月―三月

肌着に首するりと通し迎ふ年

初湯してうすぼんやりとおもふこと

正月のもう散らかせる居間跨ぎ

わが町の航空写真初刷に

手の空く妻今初刷をまとめ読み

喜んで孫に振り回さるゝ年

換気して四日の風に生きづきぬ

八幡宮破魔矢握りて五十段

初懐旧飛脚通路も埋まる映画館

齊奥塩原 新湯温泉の日髭をたたいてあたりけり

ふらふらと湯中りに似て舞ふ雪も

餅腹を暫し伸ばして貉の湯

画家たらんおもひ雪山前にして

熊笹の雪にへこたれゐる姿

雪捨つる雪気に頬の鳴るごとし

雪上をドドと車の鎖音

共同湯木目がうれし宵の雪

つららつらら隣のつららみて育つ

ざうざうと頭の冴え山の粗き湯に

初春や出湯のラドン含有量

湯上りの牛乳昼の雪見つゝ

雪搔塩原温泉いて橋より落とす男かな

めでたかり蜜柑に種子のあることも

松過ぎの少し熱めの湯の加減

会場にマスクの市松模様かな

肝心な話はマスクとってせむ

風邪薬もつたいなくも剩りけり

結氷湖足踏みをして暖をとる

へし折つてみたくなるもの氷柱の意地
晩生なる蜜柑に当り外れなし
豚汁の豚を浚へる煮立汁
顎引いて冬のぼたんを撮る構え
離れ寄りためつすがめつ冬ぼたん
一遍像寒暮を歩き出すところ
目白翔ち目にも止まらぬ一を引く
霜柱意志を通して阿らず
股引をもう手放せぬ太郎月
一月の孤りごろの雲ぞ佳き
金柑を生らせ死ぬまで棲む家ぞ
松とれて太田胃散もなべて暇
締め直す蛇口の緩み一月盡
完熟の蜜柑手にせる初三十日
春節や人波の上の朝陽門
春節や銅鑼の巨濤に吞まる路地
春節の飯店気前よき盛り付け
春節の関羽煙たげ支那線香
春節の円卓ぐるりぐるりかな
豚饅頭を山積み春節セールなり
魚団子スープの湯気に春節来
曇り空春は何處かで足踏みして
野草観察みんなほほうとシモバシラ
あれこれと今年の風邪の諸症状
裸木のこよなき艶がすべてなり
尋めるなら何處そこの梅囲み記事
立春の一語を以て押し切られ
寺町の梅の遅速を見て歩かむ
枯蔦の系図を横に拡げけり
二つ目の雪達磨あり作りかけ

股引を履いてゆけとよ事事し
ぼんく^{金沢八景}ら馬刀掘り返されてしまひけり^{乙鱸海岸}
永日の袋イソメに逃げられし
海苔拾ふ海苔の如くに漂ふて
逆光に海苔掬ふこと百万遍
ひとり来て冬の石尊の海っぺた
海苔育つ海は広いな大きいな
紅梅に佇めば土ふかふかと
早過ぎることは承知の上の探梅
江戸に名を取りし杉田の梅の裔^{妙法寺}
木瓜の花もってまはらぬ俳句好し
チューリップ植えた通りに芽を出せり
不細工よ牡丹の木の枯れざまは^{ボク}
春日中寄り来る鳩の遠慮がち
袖の雲脂指で弾きぬ春遠し
氷見て戻る他には用はなし
手袋の片方拾ふてみたもの
せきれいの翔び歩き又翔び歩き
もくれんの毳立つ冬芽こんなにも
クロツカス一輪春めく日も一輪
寒椿落ちねば心に落としてみぬ
石を替ゆ蠅と退屈同士かな
半島の山に春来とやって来ぬ
山茱萸の日暮れ惜しまむ片田舎
白梅の客気類さす風の中
犬ふぐり川はなめらか音立てず
心情は今も氷柱のごとき人
柿の蒂無造作も斯く極まれば
一切を封ず氷の初一念
冬日輪古佛の笑まふ如くなり

剪定の音の小さくはつきりと
樹々にこゑ懸けて廻れる春そこに
着膨れたやうな俳句の道具立
梅林を一巡りして退場す
同じ道黙し戻れば冴え返る
何もせねば木石の類枯日向
指葉車窓に桃の咲くを見て
三春のここに始まる濤の音
これと云ひ見るもの無き中藪椿
金縷梅の黄色は中華菓子のいろ
春荒れ佐野美智さんに転倒せらるかお大事に
介護バス来るを婆待つ春なれや
春告げに来る風今か今かとも
来る筈の春が何處かで道草す
文旦は親分その他はその子分
烈風もものかは梅の俠気かな
鳩日比谷公園を見て憩ふ視線も春めけり
皇居前皇居前東西南北日永人
皇居前手を振り歩く日永人
二重橋交番脇の柳の芽
狂歌堂梅屋敷 梅林真顔の歌碑に梅の風
海苔拾ひなどに精出し二月の日々
ぞんぶんに海苔拾ひして手近な海
節分草節分草と尋め歩き
鶯の伝来のこゑ破綻なし
鞘走る音して竹の葉の降り
おじやして一息つける雨の昼
鴨蹴って水裏返る春なりし
桜草殖やせり妻の名は陽子
折り鶴にひとり遊びの日永妻

春星の間合を一つ一つ見て
紙風船春を手玉にとるごとく
春の鶉こんな日もあるこんな日も
伊予柑を凹ます力聚めけり
のどけさは五家宝噛みしあとの兒
春の蠅庭石はまだ冷たかろ
三寒と四温のぎったんばったんこ
もう一彩むらさき欲しき雛あられ
デザートに年々大き苺かな
先づ以てデコポンのこのデコボコ感
都内にしてもう咲く大島桜かな
犬ふぐり殊勝といふに余りある
先達の魚氷に上る句を鏡
永き日の寺に石工の手弁当
堂裏金澤文庫に古草武州金澤山きんたくさん
犬陰囊いぬふぐりあらぬ文ン字をあてがはれ
水輪生み継ぐ雨以て春意とす
づけづけとももの云ふひとや花貝母
摘草の人のくつつき離れたり
ぽかと生れ干潟のひよっこりひょうたん島
流れ海苔鴉のごとく翔けるあり
出刃持って小柴の寒海苔百叩き
何でも綴ず孫のホチキス音長閑
紙風船ぐちゃぐちゃにして興ず孫
怪獣ごつこ紙風船にもう飽きて
犬田浦梅林ふぐりひとっこひとり来ぬ山に
鶯の啼くや母音を先立てゝ
強情な野梅の枝と見て過ぎし
こんにやくのさしみふるふる雨水かな
剪定の枝荒括りして段畠

平日の梅林に人こんなにも
登り口オオイヌフグリちりばめて
紅梅を丹念にみる夫婦もの
頃合ひを見計らひ咲く梅律義
梅林に吹き募る風尽きるなし
紅梅に侍りて一言あるべきか
をみならの眉のほとりの梅の花
早梅の芳香よどんではならぬ
寒ければ一直線に進むのみ
白加賀に長居豊後に又長居
魁の梅好き者の一団か
梅好む齡となりて佇めり
ともかくも交通不便この梅林
観梅におもむく一団前に行く
犬ふぐり心許なき日影得て
浅蜷掘る大潮小潮小潮の日
乙 鱸海岸
雛あさりぽちよんと波間に擲てり
浅蜷居る證しそここ砂ゑくぼ
潮吹を邪慳に退けて鏘シヤベル
浅蜷掘りし手がからからになりゐたり
春の潮上げてゐるやら退いてゐるやら
二三箇所試し掘りして浅蜷掘
莫迦げたる潮吹を又掘り当てぬ
韓少年時代、マメコブシ蟹をまんじゅう蟹と呼び親しめば信の股潜りかやまんじゅう蟹
沖を見てゆけば石蓐に足とられ
鳥雲に性懲りもなく戦すか
伸び縮む鳩の瑠璃首春隣
今もある文房具店丁字の香
山茱萸の黄が開け放つ朝なりき
川明り余寒明りと云ふべきや

梅の上に聳ゆ富嶽も相模ぶり
桃どちのけふは節句と云ひ交し
ここに来て天気足踏み柳の芽
風きつく崩れ出したり鴨の陣
伊予柑に手の脂ぎる五十代
鯛釣草うらはらの世を明るうし
春なれや土搏つ雨の返点
まんさくの隙間だらけの花愛す
心臓の温み掌移し賓頭廬さま
冬ざれの天道虫は能く歩く
腑に落ちぬ古草の径途中まで
潦それみよと云ふ寒さかな
ふらここは青天井より垂れゐたり
宝籤春の陽気に乗せられて
長閑なる日和と顔に画いてあり
直に聞くことは佳きこと桃の花
啓蟄や元の地番を覚えゐて
映るもの枯れ一色や鴛鴦の水
支那満作風に緩みの見えにけり
山茱萸が咲いて初陣めける日よ
山茱萸咲く笙・筆簾の樂あらな
満作はお天道様のおかげ咲き
浅春の横にひろがる濤の音
晴天三日節句を待たず桃ひらく
お茶碗と同質のおと寒卵
王道は山茱萸の黄を貫きて
汐干狩時間を暫し棚あづけ
潮吹に親方風を吹かす馬鹿貝^{バカ}
若布汁これはやっかい吸ひつく蓋^カ
春は未だ浅く塔婆の前のめり

手品にも芸風ひらひら春めく指
巻きゆるく日永の遺伝子・滑り台
ヒトラーの雄辯満作前にして
満作の鉤ハケンクロイツ十字靡かせて
紙雛に倒れ易くて金屏風
突き立てしシャベルにしとど春の雨
小物いろいろ殖えし雛を飾るかな
べべ濡らす如雨露遊びもたけなはに
山茱萸に日はまだ粗き洗濯物
渋さとは恰好よさとは山茱萸咲く
熱海まで見にゆくことに寒桜
花桃のおたふく美人笑ひづめ
さんしゆゆの持ち味曇れば曇る形なり
まだ顔の寒き日向を歩みけり
のどけしや平たく生きて平たき句
蜷の道思へば遠くへ来たもんだ
略式も略式雛飾りけり
芳香茶薔薇の季節にまだ遠く
フレパティ
人間も木石の類蠅の子に
止まらせてなまあたたかき春の蠅
蠅の子の触りたくなるもの数多
春の蠅ちちんぷいとぞ消えにける
蠅の子の元へ戻ってをりにけり
このところデージーに凝る庭の主
くちばしの黄色い鳥とだけ答ふ
春昼をきうと年取る魔法瓶
さんしゆゆの花了ふ翳がよぎること
寒鯉の鰭あほりたる水玄くろき
人参は三月のいろ煮て和えて
人参を撰とらねば生活習慣病

失敬す大島桜の花房を
寒桜ほゝうと腕組みながら
毛むくじやら齒朶打つ暖雨生々し
雛流し三浦半島 芦名 淡島様ぽつんと来たる鹹き雨
雛流し催す宮の五百椿
雛流し椿の宮の直下より
細れ波ひひな流されゆくわいな
建長寺裏のぼたぼた椿かな
啓蟄や耳搔き棒の塗剥げて
帝王学山茱萸明り取り込んで
あらよつと電気毛布に滑り込む
遠浅の海と聞くさえ春めきて
干潟現る順序がありて海松の海
なまくら出刃もって寒海苔叩くかな
好き嫌ひ直らぬ齡はうれん草
猫柳だいぶ陽気がよくなつて
名ばかりの春嘯いて反れる月
三寒のどつちつかずの夜半の月
庭土に滲み込むまでの春の水
好きな時好きな事して日の永し
どうでもよいやうに山茱萸なりにけり
窶れもう取り繕へぬ花さんしゆゆ
老人の指図けむたし花貝母
があがあと家鴨が鳴いて水草生ふ
啓蟄の亀現る苔のにほひして
ぺんぺん草奏づる風が出て来たり
白詰草真つこと冷たかりけるよ
彩どりは京劇の赤寒緋桜
残寒の竹林に首さし入れて
だうもかうも天気外れて紫荊

雛壇のありし辺りをかい撫でぬ
大風にうち負かされし水仙花
浦風にあびせ倒さる水仙花
恰好をつけて避寒の旅などと
押し黙り見居り花菜の虻の所作
涅槃図にたるむ処無し増上寺